

人物

みのかも

① 高島庄治郎

太田新田開拓に生涯をささげた人

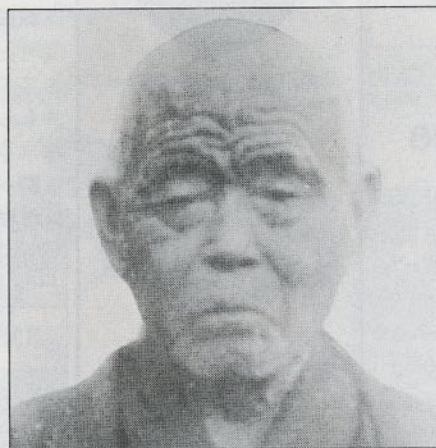
美濃加茂市太田町の西側、河岸段丘上にひろがる太田新田（現太田町西町）は、明治初年、太田宿本陣の福田太郎八が、美濃市北部の牧谷や尾張北部からの移住者を迎えて開拓に着手した土地であるが、その事業を完成したのは、高島庄治郎であった。

高島庄治郎は慶応四年（一八六八）八月十九日、羽島郡松枝村北及（現笠松町）に生まれた。父は酒飲みであったため、幼時、一家離散の憂き目にあつたが、弟小三郎と力を合わせてわが家を再興することに成功した。

明治三十八年、太田新田の土地が仲買人を通じて、売り出されているのを知った庄治郎は、これを買取り、北及から家財を荷車に積んで移住した。

当時、半纏股引きという野良着姿の庄治郎が、十六銀行太田支店に現われ、首に巻いた風呂敷の中から無雑作に五・六千円の札束を出して行員を驚かしたという話が残っているが、彼は人足や農民と同じ姿で、その先頭に立つて働き、

気どるところが全くなかった。彼の開墾方式は、それまでのものと異なり、「かぶせ開墾」といって、トロッコを利用し、大量の土を運んで原野を埋めたてて畑にす



略歴→慶応4年(1868)、羽島郡松枝村北及(現笠松町)に生まれる。明治38年、太田新田に移住し、開拓にはげむ。昭和30年第1回黄綬褒賞授与。翌31年、没、享年89才。

る画期的な方法であつたので、開墾の能率は大いに上つた。

工事には地域の人々のほか、坂祝村の大針や、蜂屋の引田からも人足として働きにきた。当時の日当は一日三十銭から三日一円、石工は四十銭から四十五銭であつたという。

その後、彼は大正二年に太田町役場から依頼されて、蜂屋の矢田池から太田新田の西部地区まで、

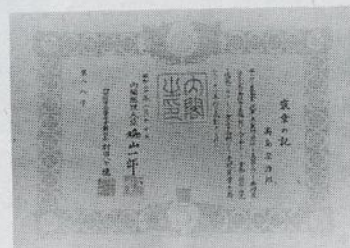
えんえん一キロメートル以上の間にレールを敷き、その泥土をさらい上げてトロッコで運んで客土した。このよく肥えた客土によつて農産物の収穫が飛躍的に増加したことはいうまでもない。

彼はこのほか、六・七町歩にわたる大規模な桑園を経営し、太田の桑問屋や、太田・坂祝・蜂屋・加茂野村の養蚕農家に売りさばいた。

庄治郎が桑代金の集金に行ったとき、札のしわを伸ばし、おし頂いて財布の中に入れた話は有名であるが、彼は常々お金を大切に

して資本の蓄積を行い、自作農になる努力をするよう周囲の農民に説いていた。太田新田の人たちが経済的な地位を向上させていったのは、彼の指導力があつたからといえよう。

昭和十七年夏、大阪市中之島公会堂において開催された全国食糧増産農民大会において、彼は全国農民の代表七名のうちの一人として演壇に立ち、生産米価をマル公



黄綬褒賞

勲章



で押えつけるだけでなく、奨励金をつけて農民の生産意欲をかりたてようとしなければいけないという趣旨の演説をして、集まった農民たちの喝采を博した。

昭和三十年、第一回の黄綬褒賞の授与にあたり、庄治郎は、多年開拓と農蚕業に精励し、農民の模範であるとして、全国の農民より選ばれて受賞の栄に浴した。しかし彼はこの時「自分は事業として(開拓を)行つただけで、賞を受ける資格はない」と、なかなか受けとらなかつたという。

彼は浄土真宗の熱心な信者で、晩年は説教を聞くのを楽しみとしていたが、受賞の翌年、三十一年九月九日、八十九歳の天寿を全うしてなくなった。法名は悉成院釈清了。お墓は境松墓地にある。(登場者の敬称は省かせて頂きました。次回は、岐阜県近代絵画の開拓者、坂井範一です。)